

看護学部における文章創作の試行授業 “Creative Writing with Visual Imagery”

—新たな教育プログラムに向けて—

井上 麻未 糟谷知香江

“Creative Writing with Visual Imagery”: A Trial Class for Nursing Students

Mami INOUE Chikae KASUYA

〔要 旨〕

聖路加国際大学大学院看護学研究科では、2023年度に「ヘルスヒューマニティーズ概論I, II」および「健康と病いの語り概論」の新規3科目を開講する。ヘルスヒューマニティーズ（Health Humanities）とは、医学教育分野からスタートした米国発のメディカルヒューマニティーズ（Medical Humanities）を前身とする学際的な新分野であり、上記は本邦初の科目開講となる。その中の「ヘルスヒューマニティーズ概論II」はオムニバス形式の授業であり、体験学習を通してスキルを学び感性を高め、創造的に応用できる実践能力を養うことを目的とする。本科目の第3回と第4回の「ヘルスケアにおける文学とCreative Writing」、そして第5回の「ヘルスヒューマニティーズと文化・心理」においては、ナラティブ・メディシンの実践に倣い、“Creative Writing with Visual Imagery”という我が国の大学院教育において初となる試みに着手する。その準備として、2022年度の前期の学部看護ゼミナールの授業において試行授業を行った。本稿は、本試行授業の概要と成果を報告し、新たな教育プログラムの開始に向け、“Creative Writing with Visual Imagery”の意義を明らかにするものである。

〔キーワード〕 ヘルスヒューマニティーズ、メディカルヒューマニティーズ、ナラティブ・メディシン、自分史、文章創作

〔Abstract〕

The Graduate School of Nursing at St Luke's International University will offer three new courses in 2023: Introduction to Health Humanities I and II and Introduction to Health and Illness Narratives. Health Humanities is an emerging interdisciplinary field with roots in Medical Humanities, which has long played a role in medical education in the US. These new courses represent the first time this subject has been offered in Japan. One of these courses, Introduction to Health Humanities II, employs experiential learning to enhance students' sensitivity and to help them develop practical skills that can be creatively applied. In the third and fourth sessions of this course, “Literature and Creative Writing in Healthcare” and the fifth session, “Health Humanities and Culture and Psychology”, we will incorporate narrative medicine principles in a course called, “Creative Writing with Visual Imagery”, the first of its kind in postgraduate education in Japan. In preparation for this unit, a trial class was held in an undergraduate nursing seminar class in the first semester of 2022. This paper reports on the implementation and results of that trial class and clarifies the significance of this new educational programme, “Creative Writing with Visual Imagery”.

〔Key words〕 Health Humanities, Medical Humanities, Narrative Medicine, Personal History, Creative Writing

I. はじめに

聖路加国際大学大学院看護学研究科では2023年度に「ヘルスヒューマニティーズ概論I, II」および「健康と病いの語り概論」の新規3科目を開講する。欧米で研究、教育、実践が進む領域横断的な新分野、ヘルスヒューマニティーズ (Health Humanities: 以下, HH) の本邦初の科目開講となる。これらの学際的な学びを通して、医療・ケアのあり方を問い、人々の健康とウェルビーイングに貢献する力を理論的、実践的に身につけてゆくことを目的とする。

3科目のひとつ、「ヘルスヒューマニティーズ概論II」はワークショップを中心とするオムニバス形式の授業であり、HHの実践である非薬理的、非侵襲的、プライマリケアのアプローチ (芸術、音楽など) を実際に体験し、感性を高め、自ら創造的に応用できる実践能力を養うことを目指す。本科目の第3回と第4回は井上による「ヘルスケアにおける文学とCreative Writing」であり、日本と英語圏の小説を用いてナラティブ・メディスンの3つの柱であるclose reading (精読鑑賞), creative writing (文章創作), affiliation (関係性の構築) を行う。第5回は糟谷による「ヘルスヒューマニティーズと文化・心理」であり、ナラティブ・アプローチの考え方を元にした実践をテーマとする。この一部としてvisual imagery (視覚的イメージ) を伴うナラティブを扱う。第3～5回に行う、この“Creative Writing with Visual Imagery”という試みは我が国の大学院教育において新たな試みであり、どのような教授内容と教授方法が適切であるか検討を重ね、入念な準備の上、2022年度の前期の学部看護ゼミナールの授業において試行授業を行った。

本稿では、本試行授業の概要と成果を報告し、新たな教育プログラムの開始に向け、“Creative Writing with Visual Imagery”の意義を明らかにする。

II. 文章創作

本学では英語の必修授業にアカデミックライティングの授業があり、学生は其中で文章創作の機会を得る。具体的には、English I-WおよびEnglish II-Wの2科目においてアカデミックライティングのスキルを養成するため、Descriptive Essays, Opinion Essays, Narrative Essays, Compared and Comparison Essaysなど様々な種類のエッセイの書き方を海外のテキストを用いて学

ぶ。受講生は毎回の授業において英作文を書き、教師が添削とフィードバックを行い、それをもとに書き直し再提出するというライティングの訓練を繰り返す行う。

Narrative Essaysの書き方を学ぶ過程において、本学ではそのエッセイのテーマを「自分史」としてきた。英語の必修授業を受講した学生は、自分史の書き方を英語で学び、実際に英語で書いた経験がある。そこで、本試行授業の文章創作にあたっては、テーマを自分史と設定し、新たに母語である日本語で創作に取り組むこととした。

まず、創作にあたっての約束事として、その自分史は書き手を主人公とするものであるが、内容は必ずしも事実に沿う必要はないこと、自らを主人公とする「物語」を創造する、つまりフィクションを書くのであるということを受講生に伝えた。このような前提のもと作品の構成を練り、文章を書き、教員との対話を通して推敲を重ね、作品を仕上げていくという一連の創作の流れを説明した上で授業に入った。

具体的には以下の通り授業を進めた。英語の授業で使ったオックスフォード大学出版の*Effective academic writing 2 : The Short Essay*¹⁾のUnit3 Narrative Essaysの簡潔な要約と練習問題を参照し、「物語 (narrative) とは何か」「物語 (narrative) の構成」「物語 (narrative) を書くためのスキル」について日本語で説明し内容を確認した。

次に、「物語 (narrative) を書くためのスキル」の中でも特に時間を表す表現、品詞の使い方 (動詞、副詞、形容詞など)、語り手の視点などの重要な事項に関して、実際に日本語のすぐれた文章を通して学ぶこととした。

教材となる作品として、自身のアイデンティティについての深い思索、および古今東西のさまざまな時間軸、文化の軸を意識して紡がれた豊かな言葉に直接触れることができる、須賀敦子の『ユスナールの靴』²⁾『霧のむこうに住みたい』³⁾および梨田香歩の『ぐるりのこと』⁴⁾を選んだ。さらに、多言語での創作活動において、言葉の可能性を追求しながら、想像力に満ちた言葉で小説を書き続ける多和田葉子のディストピア小説、『献灯使』⁵⁾も選んだ。この3名の作家には自らを表現する言葉を探しに海外に渡り文筆活動を行ったという共通点がある。それぞれ時期は異なるが、須賀敦子はイタリアに、多和田葉子はドイツに、梨田香歩はイギリスに向かった。これらの作家による、上記4作品の引用を教材として配布した。

予習として一週間をかけ、これらの作品を各自が読ん

で授業に臨んだ。授業では、それぞれの作品からの引用を読み、感想を共有し合うことで、優れた文学作品が可能とする解釈の多様性に触れるという体験をする。さらに、それぞれの作品のテーマと表現の独自性について引用を読みながら考えた上で、各作品の言葉の創造性（creativity）と想像性（imagination）について説明を行い、それらがいかにテーマの実現を可能するかについて具体例を見て学んでゆく。

これらの学びを踏まえて、次に自分史の創作の準備に入った。まずは、自分の人生について書くことの意味を各自が考えてみることを試みた。その思索のために、自分史の一例として、本学教員の猪飼やす子氏の『聖路加国際大学看護教育100周年記念誌：聖路加の看護100のエピソード』のエッセイ「バーあけみのママ」を読むこととした⁶⁾。一文ずつ、段落ごとに読み進め、エッセイの構成を把握した上で、起承転結の物語の流れの中で、語り手の視点から何がどのように語られているか、そしてその行為はどのような意味を持つのかを考え話し合い、各自の創作への導入とした。

実際の創作のプロセスは以下の通りである。これは、本学の英作文の授業の中で試行錯誤の上で確立したものであり、全てを母語に置き換えて実施した。

まずは、ブレインストーミングとして自身の記憶にあるエピソードを時系列で思いつつま箇条書きにする。書き出したもの全てに目を通し、その中から一番自分らしい、つまり自分のアイデンティティが映し出されているエピソードを複数選び出し、それらのエピソードからテーマを抽出する。例えば、本学の学生のテーマとして多いものは、「冒険」「芸術」などである。

次に、自身の人生を2つの時期に区切る（どの年齢で区切るかは任意）。例えば、選んだテーマが「冒険」であれば、人生の前半での「冒険」にまつわるエピソードおよび後半での「冒険」にまつわるエピソードを選ぶ。そして、これらの、前半部、後半部をいかにつなぎ合わせ、一つの物語として完成させるか、各自がアウトラインを作成する。

書きあがったアウトラインは教員に提出する。教員は次の授業までにアウトラインにコメントを入れて返却する。コメントの入ったアウトラインをもとに授業時間の中で、受講生と教員は一对一で対話を行い、一緒にエピソードを振り、本人が表現したい物語となるようアウトラインを必要に応じて修正する。

受講生は上記のアウトラインの修正版をもとに、日本文学のすぐれた文章から学んだスキルを用いて、自分史となるエッセイを500字ほどで書く。教員は提出されたエッセイを添削し、返却の際に個別にフィードバックを行い推敲を促す。受講生は、教員からのフィードバックをもとにエッセイを書き上げ、自分史として完成させる。

自分史の創作において、アウトラインの作成は特に重要である。教員との対話を通しアウトラインに表れている自分、あるいは隠されている自分自身を見つめ、自分自身と自分の人生を振り返る機会を得る。このような対話を通して、自らが語るべきことを自身の中から探し出し、それらを自分の物語として一つにまとめ上げる筋道を立てることができるようになる。

上記のアウトラインをもとに書き上げた初稿の修正箇所はほぼ共通しており、話し言葉から書き言葉への修正、欠如している品詞（主語や述語など）の補足、曖昧な表現の書き直し、前半部と後半部をつなぐ時の推移を表す表現の推敲などであった。この個別の添削とフィードバックにより、受講生は書くという行為には読み手を想定する必要があることを認識するようになる。さらに、自分の物語を他者に理解してもらうにはいかに書くべきか、興味や共感をもって読んでもらうにはどのような書き方をすべきかを学んだ。

以上の作業を経て再校に取りかかり、一週間をかけ自分史を書き上げた。この段階では、各自が設定したテーマに関連して取り出した2つのエピソードを熟考することで自分にとって意味深い経験を振り返りそれらを整理し結び付けることができるようになっていく。最終的に授業での学びを活かし、推敲を重ね、これらを自分の言葉で表現することを試みる。自分史のテーマが明確になっているため、優れたタイトル選びも可能となり、作品と呼ぶにふさわしい自分史が完成することになる。

Ⅲ. Visual imagery（視覚的イメージ）を伴う物語

ナラティブ・メディスンでの精読の対象は、もともと文学テキストであったが、その後、絵画・写真・映像などのビジュアル・アートにも広げられている⁷⁾。ビジュアル・アートのなかでも特にテキストのない視覚的イメージは見る人によって受け取り方に幅があるが、ナラティブ・メディスンでは一つの視覚的イメージから連想されるものを各々が自由に語りそれを共有するという実践が行われている。ナラティブ・メディスンにおける視覚的イメージは、同じ対象に対する各々の自由な連想を共有することを通して多様な見方があることを実感し視野を広げるための素材、と位置づけることができるだろう。

今回実施した“Creative Writing with Visual Imagery”では視覚的イメージを、物語の表現をより豊かなものにするために使用している。物語の内容にふさわしい視覚的イメージを学生自身が選んでいるが、自分で描いた絵や自分で撮影した写真はもちろん、自分以外の人による絵や写真を使用してもよいということにしている。後者の使用に際しては著作権に留意する必要があるが、たと

例えばインターネット上の画像のうちクリエイティブ・コモンズ・ライセンス（Creative Commons license: 以下、CCライセンス）を付与されたものを使用する方法がある。自分で絵を描いたり写真を撮影したりすることが難しい場合でも、インターネット上まで範囲を広げれば自分の伝えたい内容にふさわしい視覚的イメージを入手しやすくなると考えられる。なお、視覚的イメージをつけた物語を共有する機会として、授業内で発表会を行っている。

以上より、“Creative Writing with Visual Imagery”における視覚的イメージの用い方はナラティブ・メディスンでの使用法とは異なるものの、多様な物語を共有して視野を広げるという観点ではナラティブ・メディスンの目指すところと合致しているといえる。

文章が完了した後の具体的な進め方は以下の通りである。まず、文章創作で例とした猪飼氏のエッセイ「バーあけみのママ」に糟谷が視覚的イメージをつけた作品を作成例として鑑賞した。これは、エッセイを短いまとまり（50～150字程度）に区切り、それをパワーポイントのスライド1枚に1つずつ割り振り、文章の内容から連想されるイメージの写真を各スライドに貼り付けたものである。エッセイでは、認知症を患う入院患者が、ナースステーションをかつての馴染みの店「バーあけみ」だと思い込んでいる様子から、看護師が「バーあけみ」のママになりきって対応しながら患者との信頼関係を構築していく様子が描写されている。ここでは患者の主観的な世界を表現するためにバーの店内を写した写真を主に使用した。ほかに使用したのは、病院内、夕焼けの空、森に差す光などの写真であった。いずれの写真も、この

物語で何を伝えたいか考えた上でCCライセンスの画像から選択した。この作品のスライドは12枚であるが、このうち4枚を図1～4に示す。

作品例を見たあと受講生は、自分の書いた物語を、内容のまとまりを考慮して区切って各スライドに配置した（スライドの枚数は任意とした）。その後、自分が表現したいイメージに合致する写真をCCコモンズのサイト（<https://creativecommons.jp/>）などを活用して探し、各スライドに貼り付けていった。学生による作品のスライド枚数はさまざまで、最小が6枚、最大が34枚であった（中央値11枚）。文章創作の文字数は500字ほどと決まっていたので、スライド1枚あたりの文字数は作品によって大きく異なるということになる。全体の枚数の少ない作品は、1枚あたりの文字数が多く文章への注意を集める印象であった。一方で、全体の枚数の多い作品は、1枚あたりの文字数が少なく視覚的イメージで語るかのような印象であった。一連の創作プロセスのまとめとして、完成した作品を使用した発表会を授業内で行い、お互いの物語を鑑賞した。

この“Creative Writing with Visual Imagery”を行った「看護学ゼミナール（心理学）」では、心のセルフケアに関連する理論について学び自分自身をケアするスキルを身につけることを学習目標の一つとしている。“Creative Writing with Visual Imagery”は自分史の作成を通して自己理解を深める目的で実施した。自分史で取り上げられるのは人生における数多の経験のごく一部に過ぎないが、短いからこそ設定したテーマに関連するエピソードの取り出し方や整理の仕方によって多様な自分史が生成される。今回作成された自分史では葛藤を



図1 バーあけみのママ (p.1)

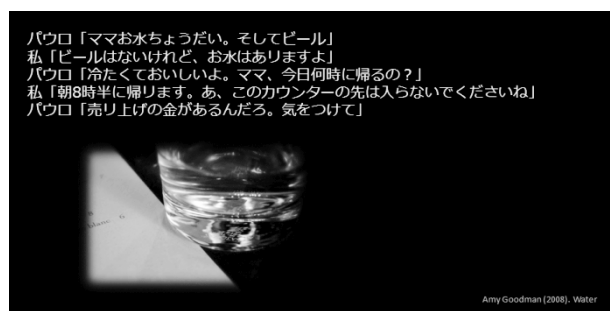


図3 バーあけみのママ (p.7)

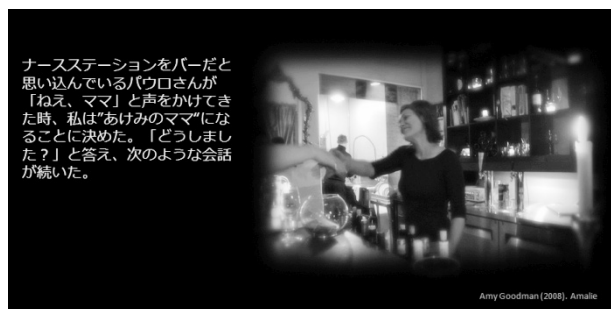


図2 バーあけみのママ (p.6)

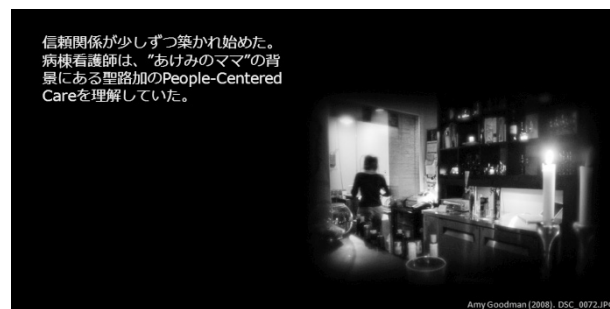


図4 バーあけみのママ (p.8)

伴う経験を含む成長の物語が多かった。この課題を通して学生たちは、葛藤を乗り越えてきた自分を改めて認識し、さらに発表会を通して葛藤を経験しているのは自分だけではないということも実感できたのではないかと考えられる。

IV. 結 論

本授業で実施した“Creative Writing with Visual Imagery”では、まず受講生は、創作の中の一連の学びと作業を経て、各自が自分史を書き上げた。それらの自分史はそれぞれ‘creativity’および‘imagination’が発揮された創造的な物語として完成を見た。その次の段階として、その物語表現をより豊かにするために、視覚的イメージを使用する。物語の内容にふさわしい視覚的イメージを学生自身が選び、一つの作品に仕上げた。この一連の創作プロセスの最終段階としてお互いの物語を鑑賞する発表会を授業内で行った。“Creative Writing with Visual Imagery”の自分史の作成により、自己理解を深めると同時にお互いの物語を分かち合うことで、多様な価値を知り物事を多層的に見ることができるようになる。その結果、他者の物語を尊重し丁寧に耳を傾けることが可能になる。つまり、“Creative Writing with Visual Imagery”により、創作の喜びを経験することに加え、新たな物の見方を獲得することになると言えよう。

謝 辞

看護の尊い営みを物語というかたちに昇華した猪飼やす子氏のエッセイに敬意を示すとともに、貴重なエッセイの使用を快諾してくださった猪飼氏に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Mayer, P. Effective academic writing 2 : the short essay. Oxford: Oxford University Press; 2006.
- 2) 須賀敦子. 須賀敦子全集第3巻: ユスナールの靴. 東京: 河出書房新社; 2000.
- 3) 須賀敦子. 霧の向こうに住みたい. 東京: 河出書房新社; 2003.
- 4) 梨田香歩. ぐるりのこと. 東京: 新潮文庫; 2004.
- 5) 多和田葉子. 献灯使. 東京: 講談社; 2014.
- 6) 猪飼やす子. バーあけみのママ: 聖路加の看護100のエピソード. [Internet] <http://www.luke.ac.jp/kango100/episode/episode17.html> [参照 2022-5-11]
- 7) 栗原幸江. ナラティブ・メディスンとビジュアル. ナラティブとケア. 2018; 9:37-44.

写真出典

- 図1 Amy Goodman (2008) . Rose. Candlestick. Amelie. [Internet]. <https://www.flickr.com/photos/amycgx/2996827034/in/album-72157607627046039/>
- 図2 Amy Goodman (2008) . Amelie. [Internet]. <https://www.flickr.com/photos/amycgx/2983522154/in/album-72157607627046039/>
- 図3 Amy Goodman (2008) . Water. [Internet]. <https://www.flickr.com/photos/amycgx/2983518508/in/album-72157607627046039/>
- 図4 Amy Goodman (2008) . DSC_0072.JPG. [Internet]. <https://www.flickr.com/photos/amycgx/2983543384/in/album-72157607627046039/>